

ノートルダム清心女子大学蔵「廻国供養行列絵巻」 について

著者	小嶋 博巳
雑誌名	岡山民俗
号	238
ページ	14-31
発行年	2017-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000168/

ノートルダム清心女子大学蔵 「廻国供養行列絵巻」について

小嶋博巳

はじめに

六十六部の廻国供養の行列を描いたとみられる絵巻については、すでに、この資料の発見者といふべき小栗栖健治によって、兵庫県立歴史博物館所蔵の二本の詳しい紹介・分析が行われている^①。さらに近稿において小栗栖は、幕末期の六十六部廻国者に関わる一群の新出史料^②（山形市・岩田邦弘氏蔵）のうちの「行レツ附（行列附）」と題された文書を取り上げて検討し、これが廻国成就の供養における行列の次第を記したもので、絵巻の描くところとかなりの一致がみられることを論じた^③。絵巻がまったくの架空の行列を描いたものではなかったことが裏付けられたといつてよい。

この論稿のなかで小栗栖は、既知の絵巻二本にあらたに二本を加えた四本の絵巻を「行列附」と対照させている。ノートルダム清心女子大学所蔵本はそこに取り上げられたもの一つである（他の一本は個人蔵とされている）。筆者は、勤務先の所蔵になるこの資料について、かつて本会の研究発表大会（二〇一一年四月）で報告したことがあるものの、詳細の紹介は怠っていた。小栗栖の新報告を機に、あらため

てこの資料を紹介し、六十六部研究に供するとともに、絵巻についての若干の私見を述べたいと考える^④。

一、資料の概要

本資料は、二〇〇九年にノートルダム清心女子大学が大阪の古書店から購入したものである。一軸の卷子本に装丁されており、表紙に題簽はあるものの、文字はない。料紙は一六枚で、裏打ちはされていない。現状で縦三二センチ、全長は六八五センチ、本紙のみで六三二センチを測る。画には鮮やかな彩色が施されており、とくに御輿や傘・僧衣の赤や、幡のとりどりの塗り分けが目につく。彩色は現状でも鮮明さを保っているが、資料全体にわたって多少の傷み、日焼け、汚れがあり、とくに本紙の天地は少々変色が進んでいる。

看過できない点として、本資料には巻首が行列の途中から始まり巻尾も途中で終わるといふ不自然があり、さらにほぼ中央にあたる箇所にも明らかな画面の不連続が認められる。この状態がどのような理由で生じたかは、兵庫県立歴史博物館の二本と比較すると容易に了解される。本資料はなんらかの事情で改装した際に錯簡が生じ、本来の後半部分が前に、前半部分が後ろにと継がれてしまい、さらに原の巻首と巻尾が数十センチずつ失われているのである。内容を理解しやすくするため、錯簡を本来の状態に戻し、さらに参考として欠失した巻首・巻尾に兵庫県立歴史博物館所蔵甲本の相当部分をあてがってみると、図1のようになる。

このように復元してみると、絵巻の画面構成は、少々の異同はあるものの、兵庫県立歴史博物館蔵の甲乙両本とおおむね同じであることがわかる。寸法も、縦は両本とほぼ同じ、横（全長）も欠失部分を補えば大きな違いはなかったとみてよい。

なお、制作年代を示す文字はないが、用いられているコバルト色の色料から幕末期を遡らないと断定できる旨、中田利枝子氏（現、岡山県立博物館）のご教示を得た。兵庫県立歴史博物館の二本も、同様に江戸時代末期から明治期に入るとみられている^⑤。

二、絵巻の場面構成

本資料には行列に連なる人びとが計一七九人描かれている。失われた首尾が兵庫県立歴史博物館蔵の甲本・乙本（以下、単に甲本・乙本とする）と同じ構成であったと仮定すれば、巻首部分にさらに九人、巻尾に二六人が描かれていたことになり、総計は二二四人となつて、甲本・乙本の二〇七人より若干多い。以下、これらの人物群を順を追つて確認してみたい。なお、以下の見出しは原則として絵巻中に書き入れてある説明書きによるが、これを欠くところもあり、甲本・乙本を参照しつつ、適宜、（ ）で補つた。甲本・乙本に言及する際の情報はすべて小栗栖論文に拠っている。

①（**修驗方**） 錯簡を原状に戻したとき、最前部にくるのは、柿色の衣に太刀を佩いた人物である。甲本・乙本を参照すれば、この人物は「**御** 修驗方」と記された山伏の一団の最後尾である。両本ではその

前を（つまり行列の先頭を）鉄棒引と二本の幟が行き、幟には「役行者神変大菩薩」「大峰開山理眼大師」^⑥（甲本）、「天下泰平五穀成就」「大小之神祇皆来守護」（乙本）の文字がある。

②**楽人** 打物^{うちもの}（長刀）・立傘・台傘および「猿田彦大神」の旗に続き、笙・箏など奏する楽人七人が描かれる。なお、打物等三人は甲本・乙本にはない。

③**大導師** 鉄棒引・挟み箱（対箱）・徒伴らに先導されて、導師の乗った駕籠が行く。駕籠の前後に打物・立傘・台傘などを配して、導師の格式を表現している。駕籠の脇には稚児も見える。

④**寺院方** 緋の大衣を着けた五人の僧が、傘を差し掛けられて歩む。甲本・乙本は「寺院法中方」「御法中方」とする。伴僧を務める法中である。

⑤（**四神幡**） 鉄棒引に続いて、四神の幡が登場する。ただし、白虎の幡が朱、玄武が黄など、幡の色は五行に適っていない。

⑥**合せ笈** 白衣を着けた二人の六部が丈の高い笈を負い、笈の頂部から下がったざる鉦（磬・磬子）を敲きながら、向かい合つてステップを踏んでいるように見える。笈の形状は、幕末から明治期の写真（図2）にしばしば登場するものと同じで、頂部に天蓋のように六部笈が取り付けられている。むこう向きの六部の笈の笈は、甲本・乙本同様、地蔵である。

⑦（**諸国靈山幡**1） 花籠、「日天子」「月天子」の幡に、諸国靈山の幡が続く。幡は、「出羽国羽黒山大権現」「出羽国湯殿山大権現」「出羽国月山大権現」「下□国男体山大権現」「越後国□□」「伊予国



観音経ヨミ

〔国家安穩〕竿灯

〔一天四海〕竿灯

〔武蔵国高尾山大権現〕幡

諸国高山之御幡

〔遠江国秋葉山大権現〕幡
〔金毘羅山大権現〕幡



〔供養仏〕



(兵庫県立歴史博物館蔵甲本 巻尾部分)

大学蔵「廻国供養行列絵巻」(後半部)

(錯簡を原状に戻し、欠失部分に兵庫県立博物館蔵甲本の相当部分(小栗栖健治「六十六部大願行列絵巻について」=註1=より転載)をあてた。本資料が説明書きを欠く部分は、甲本のそれを〔 〕で補った)



- 「常陸国足尾山大権現」幟
- 「東叡政所」幟
- 「頼朝房」位牌
- 「安国院殿」位牌
- 「東叡山」位牌
- 「御室御所」位牌
- 「御室御所」幟
- 「盛物菓子」
- 「今上皇帝」位牌
- 「造り花」
- 「越中国立山三所大権現」幟
- 「豊前国彦山大権現」幟
- 「縁起ヨミ」
- 廻国元祖縁起
- 諸国御宿帳
- 現装の巻頭



- 役人
- 「奉納大乘妙典経六十六部大願成就」幟
- 「天蓋」
- 本願主
- 御納経御輿

図1-2 ノートルダム清心女子



楽人

大導師

現装の巻末



- 〔東三十三ヶ国御宿安全祈〕 幟
- 〔西〕三ヶ国御宿〕 幟
- 〔天下泰平国土安穩〕 幟
- 〔駿河国富〕山浅間大井〕 幟
- 〔豊後〕 幟
- 〔甲斐甲斐国金剛山大権現〕 幟
- 〔武蔵〕 幟
- 〔伊豆国伊呂山大権現〕 幟
- 〔奥陸〕 幟
- 〔常陸国八溝山大権現〕 幟
- 〔弥陀流シ念仏〕
- 〔五穀成就〕 竿灯
- 〔天下泰平〕 竿灯
- 〔出羽国〕大権現〕 幟
- 〔下野〕 幟
- 〔加賀国白山大権現〕 幟
- 〔伊予国石鉄山大権現〕 幟
- 〔越後国〕 幟
- 〔下〕国男体山大権現〕 幟
- 〔出羽国月山大権現〕 幟
- 〔出羽国湯殿山大権現〕 幟
- 〔出羽国羽黒山大権現〕 幟
- 〔日天子〕 幟
- 〔月天子〕 幟

大学蔵「廻国供養行列絵巻」(前半部)

(錯簡を原状に戻し、欠失部分に兵庫県立博物館蔵甲本の相当部分(小栗栖健治「六十六部大願行列絵巻について」=註1=より転載)をあてた。本資料が説明書きを欠く部分は、甲本のそれを〔 〕で補った)



(兵庫県立歴史博物館蔵甲本 巻首部分)



「猿田彦大神」旗

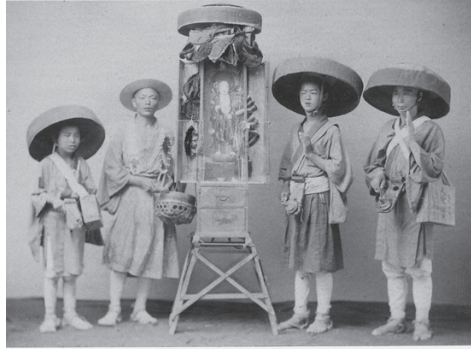


寺院方

〔四神御幡〕

合七笈仏

図1-1 ノートルダム清心女子



PILGRIM PRIESTS WITH PORTABLE SHRINE.

図2 幕末・明治前期の外国人向けの土産、「横浜写真」に写された六部と笈（筆者蔵）

だで異同が大きい。先頭は出羽三山で（この点は甲本・乙本も同様）、これらの幡にのみ、竿頭に幣がつく。

⑦（弥陀流し念仏）「天下泰平」「五穀成就」とある竿灯に続いて、六部笠をかぶった四人の六部が、腰の鉦を打ち、手の鈴を鳴らしながら進む。本資料にはないが、甲本・乙本はここに「弥陀流（シ）念仏」と書き入れている。

⑧（諸国霊山幡2）ふたたび諸国霊山の幡が登場する。「常陸国八溝山大権現」「奥陸国」「伊豆国伊呂山（石廊山カ）大権現」「武蔵」「甲斐甲斐国金剛山大権現」「豊後」「駿河国富山浅間大井」に、「天下泰平国土安穩」の八本である。

⑨ 諸国御宿帳・廻国元祖縁起 つづいて「東三十三ヶ国御宿安全祈」「西三ヶ御宿」の幟、さらに「宿帳」と書かれた帳面を捧げ

石鉄山大権現」「加賀国白山大権現」「下野」「出羽国」大権

現」の九本と、奥に配置されていて文字の書き入れのない一本の計一〇本である。霊山の幡はこのあとにも都合四回登場しており、最後に「諸国高山之御幡」と説明される。霊山の順は、三本のあい

持つ袴・刀の人物、巻物を三方に載せた同様の人物が進む。甲本・乙本の説明書きは、「諸国止宿帳」「六十六部縁起巻」（甲本）、「諸国御宿帳」「六十六部縁起持」（乙本）である。

⑩（縁起読み）蓮華を持った白衣の人物が続く。本資料にはないが、甲本・乙本ではこれを「縁起ヨミ」「縁起読」と説明している。前を行く「廻国元祖縁起」、つまり廻国納経聖・頼朝房の源頼朝への転生を語る六十六部縁起を読み上げる役である。

⑪（諸国霊山幡3）三たび霊山の幡が登場する。ただし、七本中の二本に「豊前国彦山大権現」「越中国立山三所大権現」とあるのみで、他の五本には文字はない。

⑫（位牌群）袴を着け刀をさした人物群が花・線香立て・菓子（カ）を捧げて進むなかに、五つの位牌が登場する。前方から、「今上皇帝」「東叡山」および「御室御所」、「頼朝房」および「安国院殿」である。頼朝房は前出の縁起に登場し、廻国の元祖とされる人物、安国院殿は徳川家康の法名である。後述するように、これらの位牌については甲本・乙本とのあいだに少々興味深い異同がある。この一群の脇には「御室御所」「東叡政所」の幟が見える。この二本の幟とそれを持つ人物は、切り抜きを貼り込んだものである（貼り込みの下には画像は確認できない）。

⑬ 諸国高山之御幡（諸国霊山幡4）拍子木を打つ男をはさんで、前半に一〇本、後半に九本の幡が行く。うち前半の三本に「常陸国足尾山大権現」「金毘羅山大権現」「遠江国秋葉山大権現」、後半の一本に「武蔵国高尾山大権現」とある。後半部にはじめて「諸国高山之御幡」の

説明書きがある。甲本・乙本ではこの後半部の九本（九人）はここには見えず、行列の最後尾にほぼ同じ姿の一群が描かれている。本資料はその部分を失っており、この一群が行列末に再度登場していたかどうかは明らかでない。

⑭ 観音経ヨミ 二人の鉄棒引、「国家安穩」「一天四海」の竿灯に続いて、経本を手にした男一〇人が読経しながら進む。うち七人は白衣である。なお、鉄棒引の着る半纏の背には、村の若者組の一員であることを示す「若」の字が見える。

⑮ 御納経御輿 花籠や袴・刀の男たちに先導されて御輿が行く。御輿の周囲を四天王の幡が守護する。甲本ではここを「神社仏閣御納経御輿」とする。乙本には説明書きはない。

⑯ 本願主 手に蓮華を捧げた白衣の男女が、それぞれ天蓋を差し掛けられて進む。夫婦であろう。それぞれの両脇に稚児が従う。うしろに行く朱の幟に「奉納大乘妙典経六十六部大願成就」の文字がある。

⑰ 役人 袴に刀をさした男六人が続く。この姿の人物は各処に登場するが、ここでは「役人」と説明されている。ちなみに甲本も同じ、乙本は「御世話人御衆中」と記す。

⑱ (供養仏・縁の綱) 本資料はこのあと、笈を背負い、ざる鉦を敲く六部の姿で途切れている。甲本・乙本では、このあとに、六部の背負う笈仏から延びているとみられる綱に取り付く男女一六人を描き、甲本は「供養仏」「六字念仏二而縁之綱ヲ引」、乙本はまとめて「供養負仏えんつな御手乃糸」と説明する。「奉唱無量寿宝号」(甲本)、「六字誥念仏」(乙本)の幟が立つから、念仏を唱えているのであろう。

本資料でも、笈から綱ないし紐が伸びているのがかるうじてわかるので、やはり縁の綱(善の綱)にすぎる人びとが描かれていたとみてよい。なお、甲本・乙本ではそのさらにあとに、笈を背負った六部が再度登場し(乙本のみ、「供養_マ仏」との説明がある)、五たび、諸国霊山の幡が登場して行列が終わる。この霊山幡の一群は、前述のように本資料では霊山幡の第四グループ(⑬)の後半に登場している。

以上、画面の構成についてみてきたが、描かれた人物群は兵庫県立歴史博物館蔵の甲・乙両本とおおむね一致していることがあらためて確認される。描法も共通のものである。ただし、人物を子細に比較してみると、ほぼ同じ姿態をとりながらも、顔立ちや着物の柄、道具の細部などにかんがりの違いがあることに気づく(図3)。小栗栖は兵庫県立歴史博物館の二本について、原画を引き写して作成されたもので、工房的なところで量産されたと推測しているが、本資料によつて、この推測は動かないものになったと思う。



図3 兵庫県立歴史博物館甲本(左)とノートルダム清心女子大学本(右)の描写の違い(前者は小栗栖健治「六十六部大願行列絵巻について」=註1=より転載)

三、制作主体と制作目的

この絵巻が何を描いたものかについては、すでに異論はなからう。行列の焦点は、華やかな天蓋を差し掛けられて歩む男女の本願主と、その前に行く御輿である。願主に続く幟には「奉納大乘妙典経六十六部大願成就」(甲本も同じ。乙本は「奉納大乘妙典六十六部日本廻国供養」とあり、この行列は、本願主夫婦が六十六部廻国を成就したことに對する供養儀礼——廻国供養の一場面である。人びとを結縁せしむべく綱が結ばれているのは、願主とともに廻国した笈仏ということであろう。御輿中には、廻国を終え、諸国の神仏の名で満たされた納経帳が納められているとみてよい。納経帳は廻国供養塔に収納・埋納されることもあったように、⁹⁾ 単なる旅の記録ではなく、六十六か国の神仏との結縁の証であり、国々を代表する靈仏靈社を連ねた神名帳・仏名帳でもある。行列は、これを供養の場へと運んでゆくのである。

小栗栖が取り上げた岩田家文書中の「行列附」は、その末尾で、供養行列が済んだのちは「供養場」で「開眼」ならびに「廻国惣回向」縁起の読み上げ、撒き銭、餅投げを行うと記しており、小栗栖は「供養場」は満願供養塔(廻国供養塔)、「開眼」は供養塔の開眼、つまり行列は廻国供養塔へ向かうと解している。¹⁰⁾ 現時点ではもともと蓋然性の高い解釈と考える。

では、こうした行列を描く絵巻は、誰によって、どのような目的で制作されたとみるべきであろうか。

まず注目する必要があるのは、画中に多数の六部が描き込まれてい

ることである。本資料の現状では描かれている人物の総数は一七九人、そのうち一七人が白衣を着けている。笈を負ったり、六部笠をかぶっている人物はもちろん、他もすべて六部とみなしてよからう(縁の綱にすぎない人びとを本資料では見ることができないが、甲本・乙本では一人のうちの九人が白衣の男女で、彼らは腰に六部特有の鉦を下げている)。つまり、ここに描かれている廻国供養は、六部たちが集団的に関与するタイプのものにほかならない。

廻国供養塔では、おおよそ一八一〇年前後(和暦でいえば文化年間)から、脇願主・世話人・助力・同行中等々の肩書で願主以外の助力者を刻む事例が顕著になってくる。¹¹⁾ 六十六部廻国者たちのあいだに廻国供養を組織的に営む体制が成立していたのである。そこに刻まれる人名には、かなりの長期にわたっていくつもの供養塔に登場する者が少なからずおり、中心にいたのは廻国を生業とする職業的六部(渡世の六部)であつたとみられる。彼らは、資金調達のための勧進活動を担い、儀礼のノウハウを提供したと推測される。さらに一八一〇年代(文政年間)以降になると、十数名からときに数十名以上の助力者を刻む廻国供養塔も各地に出現してくる。¹²⁾ そこには村方世話人として村の有力者層が名を連ねたり、「〇〇村中」「当村中」「若者中」の文字が刻まれたりすることも多い。¹³⁾ 廻国供養は、職業的六部集団が地域社会を巻き込んで行う大規模な事業となつていたことがわかるのである。少ないながら、これを示す史料も確認されつつある。¹⁴⁾ 絵巻は、このような近世後末期の廻国供養のあり方と対応するものとみななければならぬ。

本資料（ノートルダム清心女子大学本）の情報ではないが、次のことも右の推測を裏付ける。小栗栖論文で言及された四本目、個人蔵とされている絵巻について、氏から一部の写真図版をご恵授いただいたが、それには「維時明治四辛未歳南呂吉良辰」の奥書があり、さらに裏面に「備後国新太郎所持」と、所持者の名が記されている（前所持者かと思われる別の国名人名を書き直した形跡がある）。この新太郎の名が、静岡市清水区石川本町の路傍に立つ廻国供養塔に確認できる。明治四年五月二二日の紀年銘をもつもので、地元石川村住人の満願供養の塔であるが、例によって名主・若者中ら村方の関与が認められるとともに、「世話人」「後見」「立合せ八人」「助力」の肩書で、確認できるだけで四三名にのぼる六部とおぼしき人名が刻まれている（八名の女性名を含む）。その「助力」のうちに「ピンゴ新太郎」の名が含まれているのである。絵巻は、近世後末期（この例のように一部は明治初年に下る）、各地で大規模な廻国供養を展開した六部集団に関わるものであることは間違いなからう。

さらに留意したいのは、絵巻に東叡山寛永寺と御室仁和寺が登場することである。行列中で御輿と本願主に次ぐ焦点となるのは、おそらく、中ほどよりやや後ろを行く宿帳・縁起・縁起読み、それに位牌群である。五基の位牌には「今上皇帝」「安国院殿」「頼朝房」とともに「東叡山」「御室御所」の文字が記されている。さらに位牌群の脇を「御室御所」「東叡政所」の幟が行く（ただし先述のように、なぜかこの部分は人物を含めて貼り込みである）。

近世後期において、東叡山寛永寺と御室仁和寺の両寺が六十六部の

本所・本山的機能を果たしていたことは、ほぼ間違いない。とくに御室についてはすでに幕末期の六十六部支配の実態がある程度明らかになっており、職業的廻国者たちがつくるかなり組織だった集団を傘下においていたことが判明した。寛永寺については「東叡山御定目」と題する掟書以外に明確な史料はまだ確認されていないが、それが仁和寺発給の「御室御所御定目」とほとんど同内容であるところからすれば、ほぼ同様の関わり方があったと考えてよいのではなからうか。少なくとも幕末期には、六十六部と名乗って種々の活動を行うためには御室または東叡山の配下になければならない状況であったと思われる。そして絵巻の位牌や幟は、これを作成したのが両寺の配下にあった集団であることを端的に示しているのである。

なお、東叡山と御室の二つの本山・本所が存在することをどう理解するかは、一つの課題である。両者間には、天台／真言、幕府／朝廷、東／西という、ある意味でわかりやすい対立関係がある。しかし、絵巻中で両寺がまったく同じ扱いで併置されているのをみれば、六十六部に二つの（対立する）セクトがあったとみるのはおそらく適当ではあるまい。岩田家文書中には御室配下の集団への加入を示す諸文書（「御室御所御定目」を含む）とともに、東叡山の「御定目」の写しも遺されている。はなはだ比喩的な表現にならざるを得ないが、両寺は楕円の二つの焦点のような関係にあつて、相補的に機能していたと考えられないであろうか。

さて、以上のように、絵巻の制作主体を東叡山および御室配下の六部集団であると考えれば、かつまた、絵巻がある程度量産された

という事実を踏まえるならば、その制作目的や使用法はおのずと推測されてくる。これは六部集団が取り仕切る廻国供養のモデルを描いたもので、有り体にいえば、彼らが供養を売り込むための営業活動に用いたものであろう。六部集団は、六十六部の満願成就に至った廻国者があると、またときには集団のうちから満願成就したと称する者を出して、廻国供養の催行を働きかけ、そのモデルとしてこの絵巻を示したのではあるまいか。本資料にはくりかえし繰り返したと思われるような傷みや皺があるが、この点は甲本・乙本も同様らしく、とくに原装のままの乙本は手垢で汚れているという。これは絵巻がきわめて実用的に使用されてきたことを教えるもので、職業的六部によつて所持され、機会あるごとに広げて説明されたのだと思われる。本資料の巻首・巻尾が失われているのも、あるいはその使用法からくるものかもしれない（甲本も首尾の料紙が切り詰められており、傷みの激しかったことを推測させるといふ¹⁹⁾）。絵巻は、いわば彼らの商売道具であつたと解してよいと思う。

四、制作年代と位牌群

本資料は、既述のように、用いられている色料から幕末以降の制作と考えられる。兵庫県立歴史博物館蔵の甲本・乙本も、幕末から明治期の作とされている。また、まだ詳報のない四本目に明治四年南呂（八月）の奥書があることは先述した。量産を想定される四本の制作時期には大きな隔たりはないと考えるのが自然である。ただ、書き入れら

れた文字に着目すると少々注意すべき異同があつて、その検討によつて、本資料および各本の制作年代はいま少し追究できそうに思われる。注目したいのは、行列中に登場する位牌群の文字である。そこに書き入れられた文字が本によつて微妙に異なっているのである。

これを比較する前に、まずこうした位牌が実際に廻国供養に登場したことを確認しておきたい。

新出の岩田家文書「行列附」は、このことを証明したといつてよい。そこには「位牌」の文字はないものの、「今上皇帝」「東照神君」「法性淨院」（頼朝房の院号である）、および「御室御所御免」「東叡山御免」が列挙されており、文久二年（一八六二）の羽田国村山郡飯塚村休造の廻国供養にこれらの位牌が登場した（あるいは登場する計画が立てられた）ことは間違いない。

確認できる史料は他にもある。文政一三年（一八三〇）、安房国平郡宮本村（現、南房総市富浦町宮本）において肥前と安房の二人の六部を願主とする廻国供養が行われたが、その終了後、願主以下の六部集団が「今上皇帝聖寿万安」「南方火徳將軍聖衆」「元祖頼朝坊智盛法師」「当地頭三枝主膳殿御武運長久御祈禱」の四本の位牌を村氏神の宮本天満宮に奉納したことを示す文書が遺るのである（南房総市・生稲謹爾氏蔵「奉納奇附之事」²¹⁾）。神主はじめ地元村民の名が各位牌の「持主」として記されているので、位牌は行列に登場したものとわかる。奉納の目的は、「永々天下泰平国家安全五穀成就、別而某領主御武運長久為当村安全」と説明されている。ちなみに、この廻国供養に参加した諸国の六部三八名（うち女性六名）を列挙して天満宮神主に差し

表1 位牌の文字の異同

職・幡	位 牌	
御室御所 東叡政所	頼朝房 御室御所 安国院殿	ノートルダム清 心女子大学本
天長地久 民安太平 天下泰平 国家安穩 当御領主御武運長久	今上皇帝聖寿万安位 [すべて貼り紙] 今上皇帝聖寿万安位 県御支配御武運長久位 廻国元祖頼朝房大法師位 (文字なし) 安国院殿 (文字なし) 頼朝房 (文字なし)	兵庫県立歴史博物館甲本
奉獻御室仁和寺之宮 奉獻東叡山中堂	今上皇帝 安国院殿 頼朝坊 征夷大將軍 御領主様	兵庫県立歴史博物館 乙本
御室御所伽藍安穩旗 中堂安穩旗(東叡山中堂) 当御領主御武運長久旗 太宗国(大相国)御武運旗	今上皇帝 東照神君 法性淨院(頼朝房) 御室御所御免 東叡山御免	文久二年出羽国飯塚村供 養(若田家文書行列附)
	今上皇帝聖寿万安 南方火徳將軍聖衆 元祖頼朝坊智盛法師 当地頭三枝主膳殿御武運長久御祈禱	文政一三年安房国宮本村供 養(生稻家文書)

出した交名も遺っており、供養塔にも六部二七人、名主以下の村方三役五人の名が刻まれている。前節で指摘したような、六部集団と村方の協力による廻国供養であった。

さて、三本の絵巻に右の二つの史料を加えて位牌(および位牌群に伴う幟幡)の異同を整理してみると、表1のようになる(四本目の個人蔵の絵巻は詳細を未確認のため、表からは除外した)。今上牌と頼朝房の位牌以外は少々の出入りがあることがわかる。

絵巻の制作年代との関係で注目したいのは甲本である。五基の位牌のいずれにも文字はなく、うち三基の上部に「今上皇帝聖寿万安位」(県御支配御武運長久位)「廻国元祖頼朝房大法師位」の貼り紙がある。家康や將軍の位牌などは欠いており、東叡山と御室の名も見えない。家康(または將軍)の位牌は他のすべての史料にみえるもので、今上牌および頼朝房位牌と並ぶ基本的な構成要素であったとみられるが、

これを欠くこと、さらに「県御支配」が登場することから、甲本が明治に下ることは容易に想像がつく。同時に注意すべきは東叡山と御室である。じつは仁和寺は慶応四年(一八六八)六月をもって六十六部支配を放棄しており、寛永寺も同年五月の上野戦争でほとんど壊滅状態となって六十六部支配が続いたとは考えられない。とすれば、甲本は両寺の支配が動揺したのち、すなわち慶応四年以降に位牌の文字抜きで制作され、明治四年(一八七二)七月の廃藩置県後に貼り紙が施されたと考えてよいであろう。逆に言えばノートルダム清心女子大学本と乙本は、御室(や東叡山)の支配が機能していた慶応四年前半までの制作になるとみられるのである。ちなみに、明治四年八月の奥書をもつ四本目(個人蔵)は、位牌にも幟にも東叡山・御室の文字はなく、位牌は「今上皇帝位」「神武天皇代々」「頼朝法師」「東三十三宿」「西三十三宿」であるらしい。²⁴⁾家康も領主も消え、天皇歴代の位牌が登場している。

明治四年一〇月、六十六部集団の活動は太政官布告によって禁じられる。²⁵⁾絵巻は、幕末・維新の動乱期、東叡山と御室御所を本山にいたたく体制が動揺し終焉を迎えるなかで、六部集団によって作成され使用されていたの

である。

ところで、廻国供養の行列にこのような位牌——とくに天皇・家康・将軍・領主の位牌（家康以外は広義の寿牌である）が登場することは、まことに興味深い。これについて小栗栖は、六十六部の「天下の祈念僧」としての特質をよく表すものであり、廻国行が「世の安泰、国土の安泰を願うものであることを示していた」とする²⁶。東叡山と御室の「御定目」では、廻国は「天下泰平・国土安穩・五穀成就」あるいは「天下国家安全」を祈るものとしている。また、天保期の但馬の廻国者が書き遺した記録、「廻国道中方楽記」では、廻国は、村繁昌・家運長久・先祖代々菩提・二世安楽などともに天下泰平・五穀成就・国家安全、さらには「今上皇様御代長久」「其国の殿様御武運長久」「国本殿様御武運長久」を祈るものだとする。小栗栖は、そこに六十六部の「社会的役割」をみる。

たしかに、たとえば近世中・後期に大量に造立された廻国供養塔に目を向ければ、「天下和順・日月清明」「天下泰平・国土安全」「天下泰平・国家安穩」等々、自然と人間社会の秩序の安寧を祈る偈頌を刻むのが銘文の定形であった。先述の文政一三年の安房国宮本村での廻国供養も、六部集団は「天下泰平五穀成就之供養」と称していたし、絵巻（本資料）中にも「天下泰平国土安穩」の幡や「天下泰平」「五穀成就」「二天四海」「国家安穩」の竿灯が登場する。六十六か国を隈なく巡歴して国々の神仏に納経することにより、世の平安を祈るといえるのが、廻国行や職業六部の活動を正当化する論理になっていたといつてよい。さらに進んで、天皇や将軍・領主の安穩や武運長久を祈る

例も、広汎にみられるとはいえないまでも、珍しくはない。近年、栃木県佐野市奈良瀨町の庚申堂内の地藏像台座下から宝永期の廻国納経帳とともに四〇〇点以上の六十六部の納札が発見されたが、そのうちの二〇枚余りの札に「玉体安全」「天子御代々大將軍御代々」「金輪聖皇玉体安穩公方御武運長久」「天子御代々……大將軍御代々国司御代々」等々の文言が摺り出されていた²⁷。岩田家文書中にも、「今上皇帝聖寿万安」の祈禱と歴代天皇・東照権現・歴代將軍の回向を記す文書があり、廻国者が所持したか廻国供養の儀礼に用いたものとみられる²⁸。

もつとも、近世社会において天下泰平や将軍・領主の武運長久を祈るのは、六十六部に限られることではない。修験や陰陽師などはそうした祈禱を行っていたし、村落祭祀に組み込まれることも珍しくなかった。それは、ときに権力との関係において是非もなく求められるものでもあったろう²⁹。六十六部の場合も、そうした可能性を考えておかなければならない。

ただ、あえて言うならば、国土・国家さらにその支配者の安寧を祈ることは、六十六部にあっては本来の理念と背馳するものではなかった。そもそも六十六部は護国三部経の一つである法華経を六十六か国の神仏に奉納して歩くという巡礼にほかならず、その成り立ちにおいて国土意識・国家意識と分かちがたく結びついている。さらに六十六部には、地上の権力を否定せず、むしろそれを強く志向する態度、いわば向権力が認められる。六十六部縁起は、一介の聖が廻国納経によって国土の支配者へと転生することを語るものである。近世には、

六十六部廻国を果たせば来世は大名に生まれるという俗説すら流布していた。³⁰ 天下泰平、さらには聖寿万安や將軍・領主の武運長久の祈念と六十六部は、高い親和性をもつのである。

もとより、こうしたことだけを理由に、いわば自然発生的に今上牌や家康の位牌が登場したわけではあるまい。位牌は、どの時点か、職業的六部集団において廻国供養の様式が整備されるなかで、意識的に採用されたものであろう。そこには東叡山や御室の関与も考えなければならぬが、いずれにしても、天皇や家康らの位牌と、それに象徴させた世の平安の祈念という職能の主張は、封建社会のなかで処々を遍歴し、ややもすれば不穏な企てとして規制されかねない臨時の祝祭―廻国供養を創出するうえで必要なことであつたらう。六部集団は国土・国家の安穩を祈るという「社会的役割」を強調することで、遍歴・勧進・廻国供養等の活動を正当化したのであり、位牌はそのために必要かつ有効な道具立てであつたと思われる。

おわりに

本資料をその一例とする廻国供養絵巻は、東叡山寛永寺および御室仁和寺の傘下で活動していた六十六部集団（職業的六部集団）が、その最末期にあたる幕末から明治初年にかけて、自らが主導する廻国供養のモデルを示すために制作・使用したものであろう。絵巻が職業者としての廻国者の所持になることはすでに小栗柄が想定していたことであるが、³¹ 廻国供養塔などから知られる当時の廻国供養のあり様を考えれば、絵巻の制作目的・用途はこのように考えてよいと思う。した

がって、絵巻の行列はある意味で理想的な様態を描いたものであつて、つねにこの通りの行列が実現したと考えることはできない。ただ、このたび確認された岩田家文書「行列附」では一三〇人程度の行列が計画ないし実行されており、その検討によって小栗柄が論じたとおり、状況如何では絵巻に近い光景が展開したのである。³²

最後に一つ、課題をあげる。

絵巻には種々の信仰的要素が描出されている。山岳信仰（修験者・諸霊山幡）、地藏信仰（笈仏）、阿弥陀信仰（流し念仏・縁の綱）、観音信仰（観音経読み）である。このうち観音信仰は、観音経が法華経の一品であることからすれば、六十六部のそもその理念と矛盾はない。いっぽう地藏信仰・阿弥陀（念仏）信仰は、思想上の必然性は乏しいにもかかわらず、近世の六十六部の世界で大きな比重を占めていたことが、廻国供養塔をはじめとする種々の史料に確認される。³³ 絵巻は、近世の六十六部が念仏や地藏信仰へ多分に傾斜していた状況を端的に表現している。³⁴

そうしたなかで少々問題をはらむのが山岳信仰である。本資料では四か所に諸国霊山の幡群が登場する（失われた巻尾にもう一群がいた可能性もある）。霊山の名を記す幡は計二二本を数える。それらはかならずしも全国を網羅しているわけではなく、また甲本・乙本を含めた三本間で順番の異同や若干の出入りがあるなど、不審の点も少なくない（乙本は第三群・第四群は霊山ではなく「七仏御幢」「五仏十三仏御旗」となる）。ただ、三本とも出羽三山を冒頭に立たせる点は共通しており、三山に特別な位置づけを与えているようにみえる。さら

に、本資料ではかろうじて最後尾の一人が窺えるのみであるが、甲本・乙本によれば行列の先頭は修験者の一群であり、甲本の場合、その前を修験道の両祖、「役行者神変大菩薩」「大峰開山理眼大師^{〔源〕}」の幟が行く。

このように、絵巻には全体を通じて山岳信仰・修験道の要素が強く表出しているのであるが、しかしながら、六十六部は諸国の霊場を巡るものであったとしても霊山がとくに重視されていたわけではなく、また、少なくとも近世において六十六部と修験道組織との交渉を窺うことも難しい^{〔注〕}。出羽三山をとりわけ重んじる描き方からは羽黒修験を直末としていた東叡山の関与なども想定してみたいが、現時点では不詳と言わざるを得ない。絵巻中の山岳信仰・修験道の要素はもともと説明が難しい部分であつて、この点は研究の進展を俟ちたいと思う。

註

- (1) 小栗栖健治「六十六部を描く行列絵巻——その解釈における一試論——」巡礼研究会編『巡礼論集2 六十六部廻国巡礼の諸相』岩田書院、二〇〇三年。なお、小栗栖にはこの絵巻(甲本)を最初に紹介した論文(六十六部大願行列絵巻について)『兵庫県立歴史博物館紀要 塵界』九、一九九七年)があるが、その見解は二〇〇三年論文でおおきく修正されている。また、葬送儀礼との関連から、この絵巻に逆修の性格をみた奥村隆彦の考察(『六十六部満願成就行列絵巻』についての一考察)『近畿民俗』一五五、一九九九年)もある。

- (2) 市村幸夫「出羽の行者休造と御室配下の六十六部集団」『村山民俗』三一、二〇一七年。文久二年(一八六二)に廻国供養(満願供養)を

行なった飯塚村(現、山形市飯塚町)の岩田休造に関わる史料群で、休造は御室御所配下で活動していた六部であったことが明らかとなった。

- (3) 小栗栖健治「六十六部行者休造の満願供養」『村山民俗』三一、二〇一七年。

- (4) なお、この一群の絵巻の名称について、小栗栖は当初は一本ごとに画中の幟の字句によって呼び分けていたが、近稿では「六十六部満願供養行列絵巻」(略して「満願供養絵巻」)を採用している(同右、六四頁)。大きな異論があるわけではないが、近世を通じてこの種の供養は「廻(回)国供養」と呼ばれることが相対的に多かつたことから、ここでは暫定的に標記の語を使用しておく。ただ、将来的には最適の呼称を検討したい。

- (5) 小栗栖健治「六十六部を描く行列絵巻」(前掲註1)、一一四、一一五頁。

- (6) 同右、一一五頁。

- (7) これは、願主とその妻というよりも、夫婦者の願主を想定して描かれていると考える。廻国供養塔には夫婦と思われる男女が願主となっている例は珍しくなく、とくに近世後期に顕著である。

- (8) 筆者は、最初に甲本が小栗栖によって紹介された時点から、御輿には納経帳が載ると考えてきた。廻国供養塔への収納・埋納事例からもわかるように、廻国行において納経帳は高い聖性・象徴性を付与されていたからである。ただ、このたび発見された岩田家文書「行列附」には「妙典御輿」とある。字義どおりであれば、大乘妙典(法華經)を納めていることになる。奈良市中之庄経塚から出土した経筒(承応四年(一六五五)銘)が、三六か国の納経請取状とともに法華經一卷

を収めていたこと(矢島恭介「六十六部如法経の奉納」『大和文化研究』八・一二、一九六三年)などを想起するまでもなく、廻国成就の儀式に法華経が登場することはけつして不自然ではない。しかし、絵巻の行列で宿帳が丁重な扱いを受けていることを考えると、納経帳がそれ以上の大きな役割をもって登場しないのは逆に不自然と言わざるを得ない。絵巻の御興はやはり納経帳を載せるものと考えたい。

(9) 小嶋博巳「右造物からみる近世の六十六部」『日本の石仏』一四七、二〇一三年、一〇・一二頁。

(10) 小栗栖健治「六十六部行者休造の満願供養」(前掲註3)、六七・六八頁。

(11) 小嶋博巳「右造物からみる近世の六十六部」(前掲註9)、一二・一五頁。同「廻国供養塔から六十六部を考える」『日本の石仏』一五七、二〇一六年、一九・二九頁。

(12) 岡山県下の例を挙げるならば、次の五例が確認される。(一)内の人数は、刻まれた人名のうち、諸国の国名を冠していることなどから六部とみられる者の数である。①津山市福井(田熊境)、文政一一年銘塔(二〇名以上)。②備前市鶴海(大藏院)、弘化二年銘塔(一六名以上)。③笠岡市笠岡(遍照寺)、嘉永五年銘塔(二二名)。④倉敷市八王寺町(墓地)、安政三年銘塔(三八名)。⑤美作市山城(集落南端)、明治三年銘塔(二二名)。詳細は筆者が公開している「廻国供養塔データベース」第四版(二〇一六年八月)を参照されたい。

(13) 右註の岡山県下の例で示せば、①には近隣の村名を冠した十数名(「塔婆施主」「善之□」がみえる)、②には「村世話人」二名、③には「世話人」として「八幡道中」(八幡道は地内の小地名)、④には「三ヶ村世話方」「世話人」として一五名、⑤には「当村中」を刻んでいる。

(14) 小嶋博巳「近世末期、御室配下の六十六部集団について——三原市の新出史料から——」『宗教民俗研究』二四・二五合併号、二〇一六年、八一・八四頁。後述の安房国宮本村の事例も参照されたい。なお、絵巻には上層の農民ないし町人を描くと思われる袴・刀の人物が多数登場し、一部に「役人」(乙本では「御世話人御衆中」と説明書きがある。小栗栖氏からご提供いただいた写真によれば、個人蔵の四本目では「村方御役人衆」となっている。また本文中に触れたように、本資料には若者組の構成員も描かれている。廻国供養が地域社会とともに行われるべきものであることを示す意図があると思われる。

(15) 筆者調査。清水市教育委員会編『清水市石造文化財調査報告書』同教委、二〇〇三年、二〇六・二二三頁。

(16) 小嶋博巳「明治初年の六十六部の本山問題」『生活文化研究所年報』二五、ノートルダム清心女子大学生活文化研究所、二〇一二年。同「近世末期、御室配下の六十六部集団について」(前掲註14)。後者の論文は、御室の六十六部支配の実態を示す文書群(広島県三原市・個人蔵)を扱ったものであるが、このたび岩田家からほぼ同内容のものが複数点、見つかったっており(市村幸夫「出羽の行者休造と御室配下の六十六部集団」前掲註2)、幕末期の御室の六十六部支配があらためて裏付けられた。

(17) 岩田家文書をみると、嘉永七年(一八五四)、御室の六十六部総宰役が、爾後は菅笠(御室から下された天蓋ではない笠の意か)に鉦具を用いた「六部に紛らわしき風鉢」で廻国することを禁じ、また安政三年(一八五六)、六部集団が、仲間入りする前の廻国者を六部とはせず「神社仏閣大社之鉢二面」と表現しているも、こうした事情を示すものと思う(市村幸夫「出羽の行者休造と御室配下の六十六部集団」前掲註2、五九・六〇頁)。

なお、両寺の六十六部支配がどこまで遡るかはいまだ確言できない。「御定目」は、野田成亮「日本九峰修行日記」文化一一年（一八一四）三月一日の条に、「東叡山より出る六部の掟を見る」（鈴木棠三校注）日本九峰修行日記」宮本常一ほか編『日本庶民生活史料集成』二、三一書房、一九六九年、七二頁）とあるのが早い。しかし、六十六部廻国者の納経帳が東叡山の請取を特別扱いして冒頭に配する例は一八世紀前半から確認され（御室は一八世紀後半から）、六十六部との関わりはさらに早くから生じていた。

(18) 満願成就の供養は廻国者が帰郷して行うのが通例と考えられるが、一八二〇年代以降、廻国供養塔の願主が他国者であるという事例が全体の四分の一を超えるようになる（一七〇〇年代には全体の一割程度に過ぎない）。とくに大きな集団が関与するような事例に顕著である。六部集団内部から願主が出て廻国供養を打ち上げるケースであろう。

(19) 小栗栖健治「六十六部を描く行列絵巻」（前掲註1）、一一五頁。

(20) 小栗栖健治「六十六部行者休造の満願供養」（前掲註3）、六五頁。

(21) 南房総市富浦町宮本・生稲謹爾氏蔵。日付は文政一三年三月二十八日である。これに先立つ三月一日には、願主ら六部集団が宮本天満宮神主に対して、「天下泰平五穀成就之供養」（廻国供養）の執行承諾に礼を述べるとともに、実施にあたっては村方には難儀をかけない旨の一札を入れており、また本文に触れたように、二八日付のやはり神主に宛てた「連名」には諸国の六部三八名が名を連ねている。供養塔は地内の永福寺に立つ。当該文書については、やや不完全ながら、佐藤輝夫「民間信仰（続）大乗妙典日本廻国塔」（『館山と文化財』二五、館山市文化財保護協会、一九九二年）に報告があり（二二―二三頁）、早川正司氏も調査されていた。筆者は早川氏にお世話いただいて追調査

の機会を得た。

(22) 生稲家文書の「南方火徳將軍聖衆」は、通常の理解によるならば道教の火の神、南方火徳星君とその眷属の火部聖衆のこととなろう。禪宗・浄土宗・時宗などで、今上牌および大檀那本命元辰牌とあわせて三牌として仏殿に祀られた（『禅学大辞典』上、大修館書店、一九七八年、四〇七頁、ほか）。しかし、廻国供養に火難消除の神が登場する理由はなく、単に今上牌に随伴して持ち出されたとも考えにくい。徳川將軍をさして用いられた可能性を考えたい。なお、近世中・後期に刊本で流布した六十六部縁起には扉に今上牌を刷り出す版があり（刊年不詳・菊屋勘四郎板ほか）、そこでは中央の「今上皇帝聖寿万安」の文字の右脇に「南方火徳將軍聖衆」とある。生稲家文書・縁起とも、「徳」の上の「火」の字を小さく右に寄せて書いていることが留意される。

(23) 小嶋博巳「明治初年の六十六部の本山問題」（前掲註16）。

(24) 小栗栖健治「六十六部行者休造の満願供養」（前掲註3）、七〇頁。

(25) この経緯についても、拙稿「明治初年の六十六部の本山問題」（前掲註16）を参照されたい。

(26) 小栗栖健治「六十六部を描く行列絵巻」（前掲註1）、一三七―一三八頁。

(27) 京谷博次「三人の六十六部——永代接待船の自観・妙心&廻国行者道観法師——」『史談』一九、安蘇史談会（佐野）、二〇一三年。筆者も佐野市郷土博物館のご高配を得て追調査を行なった。

(28) 市村幸夫「出羽の行者休造と御室配下の六十六部集団」（前掲註2）、六一頁。

(29) 天保年間、武蔵・相模の陰陽師・神楽師が組合を結成する際、「天下泰平武運長久」の祈願を確約させられた例を、菅野洋介が指摘してい

る(菅野『日本近世の宗教と社会』思文閣出版、二〇一一年、三〇九頁)。

(30) 松葉軒東井編『譬喩尽並二古語名数』天明六年(宗政五十緒校訂『譬喩尽並二古語名数』同朋舎、一九七九年、四〇頁)。野暮天『新話違なし』巻四、寛政九年(武藤禎夫編『嘶本大系』第一三巻、東京堂出版、一九七九年、一六六頁)。

(31) 小栗栖健治「六十六部を描く行列絵巻」(前掲註1)、一五二頁。

(32) 口承ではこの種の行列の伝承が皆無だったわけではない。新潟県阿賀野市野地域やまのには安政五年(一八五八)の紀年と多数の助力者を刻む廻国供養塔が立つが、地元では、庄屋宅で客死した撰州の六部の供養塔で、その一門一統数百人が参集し、庄屋宅から供養塔まで一キロあまりの道を長蛇のごとき列をつくって盛大な行事を執行したと伝えられている(山賀兵一「野地域の六十六部塚」『水原郷土資料』一三、水原町教育委員会、一九八一年)。この供養塔は、小稿で論じたような近世末期の職業的六部集団によるものである(小嶋博巳「近世末期の渡世六部の廻国と作善」愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会編『巡礼の歴史と現在』岩田書院、二〇一三年、九一頁)。客死した六部の供養云々の真偽は不詳で、あるいは、廻国供養塔を「行き倒れた六部さんのお墓」というわかりやすい話にしてしまう操作の一例であるかもしれない。

(33) 小嶋博巳「石造物からみる近世の六十六部」(前掲註9)、八・一〇頁。同「廻国供養塔から六十六部を考える」(前掲註11)、一六・一九頁。東叡山と御室の「御定目」も、廻国修行者(六部)を「念仏行者」と規定していた。

(34) とくに念仏に関して、小栗栖は、近世の六十六部は実質的に念仏盟であったとみる(小栗栖健治「六十六部を描く行列絵巻」、前掲註1、

一四四・一四五頁)。首肯すべき見解と考える。

(35) たとえば、文化期に廻国した日向の当山派修験、野田成亮は、その「日本九峰修行日記」で自らと六十六部を「別派の修行者」としている(鈴木棠三校注「日本九峰修行日記」前掲註17、六四頁)。彼は、修験のなかに「六部となり」廻国する者がいたことも記しているが(同、二〇九頁)、これは二者が別系統の行であり組織であること(つまり「別派」であること)を前提とした記述と理解される。

付記 ノートルダム清心女子大学がこの絵巻を購入したのは、そもそも小栗栖健治氏のご教示によつてであった。また、新出の岩田家文書は市村幸夫氏と小栗栖氏が共同で調査されたもので、筆者はただちに写真のご恵投にあずかり、利用させていただいた。両氏のご厚情・ご高配に深謝申し上げます。

小稿は、『岡山民俗』掲載時、一部の箇所こゝろで小栗栖健治氏、生稲謹爾氏のお名前を誤記しておりました。まことに申し訳なく、両氏にお詫びいたします。このPDF版では該当部分を訂正いたしました。